

## 説教 「キリストと共に生きる」

(申命記 6 章 4-9 節 ローマの信徒への手紙 8 章 12-17 節)

2022 年 6 月 12 日

日本基督教団 仙川教会  
大串肇牧師

パウロは、ローマの教会の人々に、誰であれ、キリストを信じ、洗礼を受け、クリスチャンになって、神に救われることを説きました。しかしながら、もう救われたのだから、すべてが許されるのならば、何でも自分の考えで生きていけばいいのか、明らかにローマの教会にはパウロの考えに反対し、対立した人々がいました。そこでパウロは反論しました。

**では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。(ローマ 6:1)**

パウロは厳しい口調で彼らと闘いました。せつかくキリストの恵みにあずかった人々が元の罪の生活、自分の欲望にまかせた生活に逆戻りしてはいけない、と語ったのです。パウロの言葉を借りれば、このような放縦な生活を「肉に従う」生活であるということなのです。これらの一連の結びとして語られたのが、今朝与えられた聖書箇所です。

パウロが先ず述べたかったのは、「肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます」(13 節)ということです。確かに人間は生を与えられて、やがては死んでいく存在です。しかしながらここでパウロが語っている死とは単なる肉体の死ではありません。たとえ生きてはいても罪に従って生きるならば死んだとも同然である。つまり、神との関係を失ったままの状況であり、まさに滅びに等しいのです。

しかしそのような罪深い存在であるにもかかわらず、神の御力によってわたしたちは新しく生まれ変わらせていただいたのです。つまり、「あなたがたは生きます」(同節)と。「生きる」という言葉は死や滅びを突き破る言葉です。体がたとえ滅んだとして、わたしたちは「生きる」のです。つまり、永遠の生命が与えられたのです。そういう意味ではクリスチャンの今を生きる生活はひとつの

闘いです。自分自身の肉(あるいは罪)と霊(あるいは信仰)との闘いです。罪と死、滅びに至るのか。それとも永遠の生命に至るのか。わたしたちはたえず苦しみ、祈らざるを得ません。しかし、そのような試練の中であっても大きな恵みや慰めがあります。それは、わたしたち自身が自分の力でやり抜こうとするならば行き詰るでしょう。しかしこのようなわたしたちを神は聖霊によって導いてくださるのです。

**神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです(14-15 節)。**

「神の子とする霊を受けた」とは具体的には洗礼のことを言っています。パウロは 8 章 9 節ではこうも述べています。「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません」とはっきり語っています。この神の霊をわたしたちは洗礼を通して与えられ、また毎週の礼拝ごとに御言葉を通して経験することが出来ます。15 節後半からお読みします。

**この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16 この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になつて証ししてくださいます。(15 後半-16 節)**

イエスが父なる神をそう呼んで祈ったように、礼拝の中でわたしたちは「アッバ、父よ」と親しく神に祈ることが出来るのです。自分の力や能力ではなく、神の霊に導かれて生きることが出来るのです。これが信仰生活なのです。もう心配も恐れもいらぬのです。「神の霊によって導かれる者は神の子なのです」。「人を奴隷として再び恐れに陥れる霊」ではないのです (15 節) こうしてパウロは結びます

**もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。(17 節)**

キリストが十字架に付き、死んで 3 日目に蘇ったように、わたしたちもまた神の相続人、神の子として、キリストの永遠の生命に参加することが赦されているのです。確かに、わたしたちが生きるには様々な困難があります。初代教会は

さまざまな迫害や殉教の死、試練や危機に直面しました。この世界にあってキリストの福音を証しすることは決して容易な事ではありません。しかしながら、そのような試練や困難な時にも、キリストがわたしたちの苦しみを共に担って下さいます。イエスが十字架・復活の後に既にその栄光に与ったように、わたしたちにも、試練を超えて、その栄光に与る希望があるのです。